

「我欲」や「私心」を否定せず、ただ静かに見つめる

では、第二の誤解は、何か？

それは、古典を読むとき、多くの古典が語っている「我欲を捨てる」「私心を去る」といった言葉を、素朴かつ表面的に受け止め、自分の中の「我欲」や「私心」、言葉を換えれば「小さなエゴ（自我）」を、否定し、捨て去ろうとしてしまうことである。

では、なぜ、これが誤解か？

我々の心の中の「小さなエゴ」は、捨て去ることはできないからである。

我々の心の中の「我欲」や「私心」「小さなエゴ」は、捨て去ったと思っても、消し去ったと思っても、実は、それは、ただ抑圧し、心の表面に出ないようにしているだけである。従って、抑圧することによって、一時、心の奥に隠れるが、その「小さなエゴ」は、

いずれ、必ず、心の奥深くで密やかに動き出す。

例えば、同僚が先に昇進したとき、心の中で「自分は、同僚の昇進を妬むことなどない」と思う。しかし、数か月後、その同僚が病気で休職になったとき、心の奥に、それを密かに喜ぶ自分が現れる。

そうした形で、「小さなエゴ」は、捨て去ったと思っても、必ず、心の奥深くで密やかに動き出す。そして、それは、ときに、極めて巧妙な形で、我々の心を支配する。

例えば、先ほど述べた「我欲を捨てる」「私心を去る」という言葉。

こうした言葉を読むと、当初、我々は、この言葉を真摯に受け止め、自分も、そうした「我欲」や「私心」に振り回されない人間になりたいと考える。しかし、自分自身の中で、「我欲を捨てよう」「私心を去ろう」と考えているうちは良いのだが、修行中の人間が、この言葉を周りに対して語り始めると、危うい状態が始まる。

なぜなら、周りに対して、「我欲を捨てるべし」「私心を去るべし」と語り始めると、いつのまにか、心の中に「私は、我欲を捨てた人間だ」「私は、私心を去った人間だ」という自己幻想が生まれてくるからだ。

そして、この自己幻想の背後には、必ず、「小さなエゴ」が忍び寄り、潜んでいる。

すなわち、周りに対して「我欲を捨てるべし」「私心を去るべし」と語ることによって、周りから「あの人は、我欲を捨てた人間だ」「あの人は、私心を去った人間だ」と思われたい、自分を立派な人間だと思われたいという「小さなエゴ」が、密やかに忍び込んでくる。そして、さらに怖いことは、「我欲を捨てる」「私心を去る」と語っている人間自身が、自分の心の中で蠢く、その「小さなエゴ」に気がつかないことである。

なぜなら、我々の心の中の「小さなエゴ」は、ときに、「小さなエゴを捨てた高潔な人間の姿」を演じて、満足を得ようとすることさえあるからだ。

このように、我々が、自分の心の中の「我欲」や「私心」という「小さなエゴ」を、素朴に否定し、捨て去ろうとしても、ただ、ひととき、それを心の表面から抑圧するだけで、いずれ、その「小さなエゴ」は、心の奥深くで密やかに動き出す。

そして、この「小さなエゴ」は、ときに、「私は、小さなエゴを捨てた人間だ」という姿さえ演じて現れてくる時がある。

では、どうすれば良いのか？

「小さなエゴ」というものが、否定することも、捨て去ることも、消し去ることもできないものであるならば、どうすればよいのか？

その「小さなエゴ」が、心の奥深くで動き出し、ときに、嫉妬心、ときに、虚栄心、ときに、功名心となって現れるとき、それを否定することも、捨て去ることも、消し去ることもできないとすれば、どうすれば良いのか？

その「小さなエゴ」に処する方法は、ただ一つである。

ただ、静かに見つめること。

それが、唯一の方法である。

例えば、自身の心の中に、誰かに対する「嫉妬心」が生まれてきたとき、「ああ、自分の心の中で、あの人に対する嫉妬心が動いている・・・」と、静かに見つめることである。

ただ、このとき大切なことは、「静かに」見つめること。

その意味は、この「嫉妬心」を否定するのではなく、肯定するのではなく、ただ静かに見つめることである。「ああ、こんな嫉妬心を持ってはならぬ」と否定するのではなく、

「いや、この嫉妬心こそが自分のバネになる」と肯定するのでもなく、「ああ、自分の心の中で、嫉妬心が動いている・・・」と、ただ静かに見つめることである。

言葉にすれば、ただそれだけのことであるが、行ずるのは容易ではない。しかし、もし、それができたならば、不思議なほど、自分の心の中の「嫉妬心」の動きは、静まってい

実は、こうした「小さなエゴ」に処する、成熟した「こころの技法」は、古くから、仏教を始めとする古典において、様々な形で語られているのだが、近年の表層的な古典解釈においては、「我欲を捨てるべし」「私心を去るべし」といった単純なメッセージが、「高潔な人物」を演じたがる「小さなエゴ」の蠢きとともに、広がる傾向がある。

それゆえにこそ、我々は、古典を読むとき、「我欲を捨てる」「私心を去る」といった言葉、素朴かつ表面的に受け止めるのではなく、自分の中の「我欲」や「私心」「小さなエゴ」を、ただ静かに見つめるといふ、成熟した「こころの技法」とともに学ばなければならぬ。